日本剣道形　太刀の形解説　七本目

項目		七本目
動作の解説	①	打太刀、仕太刀相中段で、互いに右足から進み、間合に接したとき、打太刀は機を見て、一歩軽く踏み込み、刃先をやや左斜め下に向けて、鎬ですり込みながら、諸手で仕太刀の胸部を突く。仕太刀は、打太刀の進む程度に応じて、左足から体をひくと同時に、(1)諸手を伸ばし、刃先を左斜め下に向け、物打の鎬で打太刀の刀を(2)支える。 注（1）突きの気勢で諸手を伸ばす。 （2）従って双方の剣先がやや上がることになる。
	②	互いに(1)相中段になり、打太刀は、左足を踏み出し、右足を踏み出すと同時に、体を捨てて諸手で仕太刀の正面に(2)打ち込む。 注（1）相中段になるとき、双方の気位は五分五分であることが大切である。 （2）このとき、打太刀の目付は一時仕太刀から離れるが、打ち終わって直ちに仕太刀に向ける。
	③	仕太刀は、右足を右前にひらき、左足を踏み出して(1)体をすれ違いながら諸手で、打太刀の右胴を打ち、右足を踏み出し左足の右斜め前に軽く右膝をついて、爪先を立て左膝を立てる。諸手は十分に伸ばし、刀は手とほぼ平行に右斜め前にとり、刃先は右に向ける。(2)その後、刀を返して脇構えに構えて、残心を示す。 注（1）このとき、仕太刀の体は変化するが、目付は相手の体から離さないようにする。 （2）すれ違いに胴を打ち終わってから、節度をつけて残心に移る。
	④	打太刀は、上体を起こして、刀を大きく振りかぶりながら、右足を軸にして、左足を後ろにひいて、仕太刀に向き合って、剣先を中段につけ始めるので、同時に仕太刀も、その体勢から刀を大きく振りかぶりながら、右膝を軸にして左に向きをかえて、打太刀に向き合い、剣先を中段の程度につける。
	⑤	つづいて仕太刀が十分な気勢で立ち上がってくるので、打太刀は左足から後ろにひきながら、相中段になり、さらに互いに縁が切れないようにして打太刀、仕太刀ともに左足から、刀を抜き合わせた位置にもどる。
指導上の留意点	1	打太刀は気勢をこめて胸部を正しく突かせる。
	2	仕太刀も相突きの気勢で支え、その時の気位は双方五分であることを理解させる。
審査上の着眼点	打	刃先をやや右斜め下に向け鎬ですり込みながら正しく胸部を突いているか。
	打	仕太刀に支えられた時の物打の高さはほぼ肩の高さとなっているか。
	仕	突の気勢で刃先を左斜め下に向け、物打の鎬で打太刀の刀を支え気位は五分になっているか。
	仕	目付をはなすことなく、右足を右前にひらき、左足を踏み出して、体をすれ違いながら右胴を打ち、右足を踏み出し、左足の右斜め前に軽く右膝をついて、左膝を立て、諸手は十分伸ばしているか。
	仕	胴を打ち終わってから節度をつけて脇構えに構えて残心を示しているか。

出典：全日本剣道連盟「日本剣道形解説書」より